



中村俊定文庫  
文庫 18  
137



續別座教集上

元禄七戌の仲夏亡師石郷伴陽軒取の  
くろくを傳列しなむとて其の事ありて  
歎きむ名付山家のつらきことありて  
る自らのあつて年ぬき雁と即ちえよを瑞り  
四つお時全く残るゝといふ教をけり  
や——く疑波のまに終るころ其の枯葉も  
雨おとさえ一通り心記念と物まよさるる  
亡師のこゝに其の事ありて周く此の  
こゝに其の事ありて周く此の境のこゝに



三つ珠四つ玉の道をもむえ儼と集りよ  
海より此書となしけり

元禄十一寅冬春秋 子珊自序

續別座敷集上

埋火や花もぬちのきり別座敷 秋風  
舞あそびの心持り 櫓もぬ持 楚舟



石川こゝろと雨のあまらぬ鐘の音  
高年一海一 船中一玉 子珊  
ぬるぬる色麻衣 洗ひ平川の月 舟  
輝み通るゝ 烟信のゝ 丸 珊  
降さささし 持てこきくゝ 舞あそびの 子  
舞あそびを投ぐや 美ありうゝるゝ 子  
綿の夢みえつゝとくゝるゝ 五七日 珊  
待船 二進軍 伊勢力のつゝ 松 風  
又ほととくゝるゝの只ありし 舟  
嶺の平平ハ 情乃 宮 珊

相口をみ川も刀平指さるる  
 二指をみさるる 替 百姓  
 ことありとこ日月さゆる日初やら  
 おらうら撰る尽せりあ  
 大見乃使運志はる花の取  
 昔忠の孫下り免つらう以電  
 扶持方よき乃孫也  
 障子此中へ入山な 蝶  
 内袋多金の利金事ゆらり  
 名  
 今そふ糸綿を染る六月

風 珮 舟 風 珮 舟 風 珮 舟 風

能 開 乃 行 夫 の 意 安 ら じ  
 二 事 亦 分 取 何 乃 一 筋  
 怨 一 事 拵 一 事 盆 十 二  
 始 事 乃 事 一 生 一 秋  
 禮 の 中 乃 事 一 事 務 深 衣  
 心 事 傳 事 新 の 間 乃 事  
 何 事 亦 事 合 事 斗 乃 事 白 事 入  
 澄 人 事 亦 事 魚 乃 事 乃 事 乃 事 川  
 電 珮 備 乃 事 乃 事 乃 事

風 珮 舟 風 珮 舟 風 珮 舟 風

新を合さる蟬をくの房  
の法志をる花を日と結う紙  
今牡丹を十日一連うき

舟 珊 堂 珊

秋風

楚舟

子珊

各十二句

春之部

歳旦

道来又関を伊勢の初多うあ

芭蕉

新毫よ世をわらう

初餅やも葉を背戸に舟は  
なるとなるあつとくも舟を  
人先よ何よりよらんや  
舟も舟や 和葉の光る月の  
舟も子も起るといなや  
えりよあつとや 舟のあつと  
舟連うつる後の中や我ら  
えりよ舟人文字の舟

舟のあつと

獨 子 八 舟 利 依 正 子 秋  
子 桑 坡 合 水 秀 珊 風



木かくれく夢に草やさく片手  
世の鶴のき

五

響のり古交へ 扇や板乃形

加州

猿 楚舟

鶴智るや筆をうけしる外の雨

中後

朱 拙

雪やうく一形く余所乃竹

行な

車 束

鳥もくくうら比まばや懐子

加州

流 水

鶴初やまの鳥のひくく下院

利 合

骨やぬるくくぬるぬるあま穴

野 坡

梅

月雪を 場とくを 梅乃花

越中

浪 化

五

年々や馬平老きり 妻乃む

加州

野 坡

梅見く

意 程

おとくく 味きのく 梅志志

全

折よりや舟をこる 梅のふ

行賀

雲 芝

あまきやうり梅をる 梅花

子

珊

山賤の庭 梅乃舟戸の果

行賀

舟 輝

梅さゆり 梅乃舟戸の果

加州

清 風

思ふを 梅乃舟戸の果

大坂

舎 羅

梅を 梅乃舟戸の果

希 志



くろもつうしよらから

六

初梅や久書事をおひら  
園接々毒中争のほす月夜が  
美以つ色精を白く白くむ  
梅のまに生く爪と根のほし

紫青女

初風

今

岱水

柳

青柳よいふ蝶乃眠りう那  
ま柳や踏乃すく丹戸の端  
ちうつされくそえよきやなま  
柳陰のうにひれ観心利

七人

嵐蘭

利合

京風四

六楚舟

白壁より一際より一 柳陰 加列 意程

長生此思あしてうに柳の 全

駕へ引くははるる京風 日 清風

又八のきよと志あるきり 日 小筍

はよれ果るる 日 北枝

押さるる 日 一村

朝巻をたくんきき 支 梁

遠心うへん 序 志

よの 希 志

けり 子 研

何處も若くもさるる柳の形  
柳のよき花を先探返し

阪晦日

あまはれをいつの如き二十日の如き  
得る程にさるる花の晴月式  
晴日正月分の日待りて年  
明日二月の初を之に依りて  
金程とて付てさるる  
培師とてさるる  
切つ免さるる父の如き

七  
今  
杉  
風

利  
合  
千  
川  
依  
水  
大  
蕉  
栗  
小  
菊  
貞  
松

廿月を世にさるる  
おとすつさらぬや  
十程の錢とりに来りて  
備くや餅の欠ある二十日  
昔から程をぬき  
此の如くは花を  
左着を削りて  
子節米と同く  
玉くは米は忘れ

四  
腦  
伊  
水  
流  
志  
練  
松  
意  
程  
杉  
風  
子  
祐  
楚  
舟  
子  
冊

初櫻

着あきく又御識着てまつ櫻  
侍り者もほそくくや初梅  
いしくも杖持ちゆくお夢  
飛ねなく遊をえ切し初さくら  
と川きりと奴振やむさくさく良  
も蒲團よと午茶の座や初梅  
梅く暇の所何ぞんはゆえん  
ちつと本をえれを懐く梅を如  
梅よやあそび同や女新  
る信をよつらきくさくら山梅

八  
野坡  
袋水  
杉風  
子冊  
楚舟  
勇櫻堂  
北枝  
大舟  
遊絲  
八

朽く忍根のさくらや月夜新  
とさくら細工をよき居ぬをあり  
大木よねさくれぬ山乃さくら梅  
よ水の流れき流や山さくら良  
のよ衣又遊むをよきや梅狩  
是をよきあそびくへいん山梅  
さつと一筆およ上梅さくら梅  
暇居く梅引遊を梅あそび

万平  
無筆  
希志  
利合  
文鳥  
里ん女  
和風  
嵐牛  
芭蕉

花 布袋の梅嶺

梅引一や袋のくさくら月と花

芭蕉





降きぬとてさきんばなりし風流  
れとてよとて其見也なりけり  
誦くもその尾に可なり花とて  
花見ゆゑのよきや乳母の性根  
神きもよきなりとちりたり  
うけくもはれよきなりぬるなり

田家

待早や花見ゆり又其あそり  
花いづ深き東も海もぬるなり  
いづもけり大はる通るなり

士

石菖 楚舟 子大 子珊 序志 希志 泥荷 洞志 子祐 士

花よ人目着下りて是女も南

春雨

まらぬや火燧蒲室の汗をや  
まらぬと益ありけり椽欄も其の雨  
其るや急又を移もくたぬも  
何れもそのまらぬ煙るこもり

病四日

苔も枕切けさけくもたれぬ  
米帯をゆるめ守休ましくなり  
をけりよきなりとて同くや枕乃其

如所

楚舟 八子 意程 和風 杉風 太夫 此筋 遊絲

付舞りまろく神一舞人より  
字のまやゆりも餅まきとこしと  
今所分時日千原もくこの月  
長持や四日此舞も結彦補  
磨り煮焼きのふり以干貝  
今所摘や扇くののり此花  
暖初まつくいあまや柳も如  
霞ゆき嬉しや心なれ切割  
白柳を帯白乃跡をさくわむ

正 流志 蕉中 意程 貞松 利合 子珊 共筋 希志 杉風 正

臺

ねのふりきまのくみたるは喜  
意世なり身を重き舟也  
掃えや燕ままうれく飛城  
なほまの千は見えなはまの声  
大振まをれをくまねや 意

燕

乙をたつ舞鳥子や他も心  
六井志鏡の柄くく燕うる  
物産丸乃横頬打るはを免か

取所曲翠 希志 小笥 楚舟 杉風 風國 意程 伴水

雉子

看泣乃半りしよよ川と雉子此声  
鳴終子の木魂や響く樟の下

依水  
意程

よあせま

山吹乃さあよふとほき終子のま  
鳴終子や四方を思也れつとく  
静みぬれぬ雉子此調子よ

利合  
野坡

雲雀

夕つそをも見送さうとや塔といとつ  
駕のむ根あきさせて思る中し程

穉堂  
之程

椿

探針根よ山月の餅

微乃つと餅割ころれつと年哉  
つと時き物乃垣もなれぬ  
袖花やき川よと切一巻  
不川いよと格闘一今朝のる  
廣庭よ一心助垣のほもきう南

杉風  
野坡  
之程  
今  
伊賀  
卓袋

猫の意

鳥外をぬ乃申り祢これし  
子と喰ふ事忘き一や猫の意

十川  
楚舟

田螺



何を突田際の角やきくら泥  
多る百はりしけしられるる鳴る田際りる  
けしくと泡吹臥乃田り一車

昔言

きしけのぬくくきやよ芝の花  
前裁やのえう流目心をききり  
友消や降ふききも昔乃言

春耕

苗代乃着田や祖父の田を杖  
骨折の初や小田乃あ尻起し

あはしく緜く腰乃以荒田乃野  
日の耕は路のいまきや其の小田

豚月

長谷乃月松すりく乃豚牙

牙魯早かく功りききな

手をない川中乃落りり豚月

萱  
新持子事

馬乃頰押の毛はちや草きき子  
小石積地蔵乃膝のままれ車

燒野

西

荊口  
北枝  
四睡

智月  
流水  
意程

希志  
意程  
西

四睡  
子冊

全

去来

朽風  
小笥

よん福りゝるに降りぬ焼野  
と黒な焼のつゝはけり  
嵐竹  
瓢竹

土筆 若草 黄

袂より揚枝の穴 若くか  
是也一萼をへはけり  
日 祐甫  
日 菅蘇  
中後 野江  
椹堂

路に塔 蕨野老

糸よりを包かれは斜り  
荒畑や肥くおとるや  
涼葉  
遊絲

早の廊やととく  
心ゆく人平  
貞招  
四睡

木瓜

草は袋や野を暖る  
若くはゆり  
許六  
荻子

訪雨居

木瓜小松庵を板を  
そよや蛙しんねる  
曾良  
利合

藤山吹

湖流うく忘る下や  
丈州

山園平たくられせし藤のまな  
流水  
肩あしるる扇や跡をきくは  
意程  
山吹や一房はくす引志す  
野紅  
山多きとるさ持りう日紅く川  
松風

雑春

明日来以葉一束乃山躰一端  
社筋  
泉やぬくくくくくくくく  
大津乙列  
炉多きまや窓の下紅良の豆  
意程  
終系れ橘くくくくくくく  
仙枝  
陽中や向ふくくくくくく  
哉中梅意  
十六

春行くく八入柳志良をまは  
嵐青  
夜の明多きき成其水車  
大坂柳牛  
陽光ままのれぬは袋の志知り  
日湖杏  
柳くくや古き萱屋乃再び  
四睡  
降くくくくくくくくく  
野坡  
暮春  
云のくくくくくくくく  
利合  
れくくくくくくくく  
楚舟  
花くくく牡丹をまやまの  
加列牧童  
建くくくくくくくく  
松風

之吟

旅子見 昼飯付志茂の棚  
痛く病み平に押さへる蛇  
折向ふ野にそのまゝ入る  
算を数く仕とす其の夕月  
小既志勝ふを余能よきく小  
焼るよりまゝ安以 俵 炭  
行度より言ふと半 響きれ  
拭くこやふたあふふ 雨  
雪のまじり余断しを遠く常谷

子 七

子 珊

子 楚舟  
子 祐

七 祐 子 珊 祐 舟 珊

啼きわくは煩々二番月  
初好しそあれも何やそとたま  
構志垣に志れぬ門に  
月の山に嘯とを風のそよ  
淡之 来る海乃 行まぬ  
引志えく氣情をめけぬ抑へ  
そん 一と一何と蓋 嘯  
屋根板を花のこらへて積重  
中盒に子り盛る 菅乃 齋  
小登姓をまよや 冊乃 足残れく

珊 祐 舟 珊 祐 舟 珊

あまのこゝろと日影暑く思  
唐の子のまや脊通りの侍思ふ  
多僕を犯さずやまの左御  
十回まゝ中より縦忠枝を密  
降し夢川さるるえうらむ雨  
ゆくまゝ琴を船路のゆき  
伴心たう 強す須く寺  
さよあくととやら鶴乃羽繕  
庄瓦の聲を分りけり  
神を乃各月流を造るまで

六

舟 冊 祐 舟 冊 祐 舟 冊 祐 舟

十八

瘦るや美嬌下しこほ。成業  
心ととも火のあ 指辰巳凡  
響みくちやを降つ 所け架  
自墮楽や 鐘を鳴らして時外  
たほ婦くともく多以来虫  
切聲よ花乃使をよけ男  
今朝を衣文急心廿八日

秋之部

京より

あまのこゝろと日影暑く思

舟 祐 冊 舟 冊 祐 舟 冊 祐 舟

書心堂

初秋や榎の木を城を西に梅  
を河に流やとく急水はよ方の力  
和梅や板屋のをさへ又腰に抱  
はつ梅はく支をえんぬ異さか  
異も風もよるはくあやの秋  
梅を日のあまむくく秋の秋  
をすくし秋またたけし  
昔もや眼をふつたる初ありし  
あをくく跡は秋志る嘆一つ  
梅はくふ梅のまゆの梅の梅

十九

荆口 意程 全 藤室 北枝 四睡 流志 波州 杉風 曾良 十九

七夕

きなりくに残りの星はさもなし  
七夕やよはるぬく字乃流

旅宿

清らえやと青妹をう星のく  
七夕乃の中

七夕

ねう星を川越りたれ星は  
七夕やるお一重く乃事  
ねうく女をく山井や星定

ハ桑 風國 四睡 荆口 北筋 文鳥

七夕より病を移すかう我枕  
夕乃其後家の軒をさく早送  
星を過る夜娘美人をさるを  
てみや園をさる山をさる

作賀

子 珊  
桐 実  
杉 風  
望 翠

返朝

大切なる夜をあらまらり六の川  
とらぬまゝや物の思ひまじき流る  
ての川ゆゑにさるる夜を  
ゆゑにさるる夜をさるる  
七夕より病を移すかう我枕

楚 舟  
利 合  
子 珊  
太 大  
意 程

六の川 雪のかきく 山をさるる  
暮もえくゆとも早も 別を流  
さるるも 八日ぬ 夜を移す  
返すのや月の夜をさるる 望の夜  
魂をうつさるる 夜をさるる 望の夜  
裁をうつさるる 夜をさるる 望の夜  
さるるも 後の 桐をさるる 向く  
川をさるる 切をさるる 向く  
これをも 川の 深川をさるる 早  
魂をうつさるる 望の 白ひをさるる 早

貞 松  
前 口  
杉 屋  
汝 筋  
杉 風  
岱 水  
八 桑  
利 合

朝幸白花を毎りうるそ子白い  
 野路や雞白爪も交るそんらぬ  
 手後の女白花や角く女白花を  
 日新くときや拈梗の花を白花  
 葉穂ふハ野もなけと粟穂さららい  
 稗穂のハ雀のよめともむらい  
 蔓さくけ大角豆乃野を白花  
 撰採入新の小菰子たむさぬ  
 之叶の夕鳥の白花とらく  
 交のもゆみれ乃實採白花

三

依々 太 昔 泥 不 希 稗 序 子  
 々 大 任 芥 菊 志 舟 志 弼

飯乃外乃蓮の葉も白花  
 子白花乃野乃心乃てういまや  
 白花

心乃野乃心乃てういまや

魂祭

暎乃白乃ぬ氣もぬる鬼おお  
 鬼乃や云 暎のおらおら  
 柳徑や常き通さぬ奥乃なぬ  
 吟田ふ谷のさら火をんく  
 聖乃とあらく越らる石井川

子祐 庵守 曾良 利合 走風 許六



踊

澄子と地走せらるるふけ男  
なまぢりと姉らきふるおとを車  
面白く癖見ぬけり過濯

長壽

久二

曾日町  
希志  
野紅

榴書

いなすまり癖み馬北来まじ  
榴書や松子のまろき居る竹樂  
榴書ありなまろ居る地蔵式  
殊なまろまろ神のまろまろ

希志

長緒

蕉宋

子珊

牽牛花

露やまき月代乃割とこころ  
あさかろと水儂の根乃極時分  
朝露や一文もせぬ花をれと  
露よまき朝露見んと夜忘る  
露よまき朝露見んと夜忘る  
朝露や露生草花こもれ壁  
あさかろや底柱こもれ壁  
あさかろや竹たをのまき豆  
露やまき朝露見んと夜忘る  
朝露志の時分や連ふまろ

中後

意程  
風牛  
涼美  
子珊  
樞堂  
朱松  
岱水  
楚舟  
千川  
依々

新顔平素も客も水きり  
舞や故庵の中うら  
あかろやそりくの玉の  
朝と夕紅まのころる  
寝屋くら

女郎花薄

あゆ花ハまも一まも  
ま刈よるの啼きを  
我もあま志つま  
まどなる山下あ  
泣うハ伴者う来る  
泣き

三三

希志

杉風

全

全

全

全

意程

希志

全

全

三三

秋のせききやの  
の序の穂

作賢

土芽

中川

舟川のあふみ見ゆ  
舟のきい道行  
風の行跡下す  
一畔をたんま

ハ桑

秋風

右飛

二秋 草

橋あかきく音に  
音はあふ山  
舟のたも植り  
舟のたも植り

意程

杉風

概

加判

あきなりともよれぬ萩の乱と云  
心表也や萩のたもふ乃純かとは

菅中親

灰息よい川啼きやまゝくは

猿宿

妹若き綿や引良んまゝりて  
独寝り胸もまゝりたりくは  
菅縄く故全は猿宿り水  
猿おろつろく流るるまゝりて  
おろけく寝もまゝりて

序志  
子珊

蕉乘

平成

四睡

波州

紫青女

大草

北

魚のまゝをまゝりて山流る  
や〜鳴〜ちと口あき〜桔梗は  
空電〜や〜あ〜ちやる糸の中  
鳩鳩〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
まゝ山乃鈴〜〜〜〜〜〜〜〜

観世路

抱り機乃月南や志のふ草  
鳩鳩のふむる胸の赤もり水

字の啼可也清やおぬる

風四

文甫

意程

全

牧童

山店

史邦

邦明

浪声や心珠のうつるのちうらは

ここの月

この月や桐の一葉りたふくれ  
この月や庭のま踏のまふゆえ

名月

女房の子織地和ふきふり月  
あつ子しきうは月そ白ちそふ  
隈くや微塵もまこくふの月

陰の候もさ

名月き後世乃あつて月乃音

名くや鹿馬ふ起りち味をやれ

ねたもさ

この月や洞く冬結の扇子まきや  
新敷を起は 又んくふり月  
木草も心ささるる者あつ月

あつ降るれ

あつあつとさつ降るれ  
あつあつや名月此のゆき  
澄月や秋まきまき露のこへ  
新法師乃厚よ契れ

二十五

流水

意程

杉風

子冊

全

積堂

濁子

せち

七巻桂

涼葉

全

風圃

嵐竹

新

此筋

等山

名月や猿まゝのささの松  
 月見のや也のよはの一人を  
 何事そ月見は後よその鞋々帯  
 白の乃名々白の袴一のさ  
 名月 約新成や勝子口  
 流るるささのやのなを月の歌  
 ささのささの山と袖ち向るるん  
 名月や禪心川関の西を向  
 新成のささのや川下月見の歌  
 名月や登見ぬあうけ雲か出る

三六  
 文鳥  
 中川  
 全  
 意程  
 流水  
 八子  
 越中麻夕  
 加列石龜  
 伴賀車来  
 日少年花車  
 芸

夜合ささの夜ぬるささの月見  
 ささのささの—と袖細—の月  
 名月や去年のささの月見  
 名月やのささのささの月見  
 鹹ささのささの—とささの月

述懐

ささのささの月見のささの月見  
 ささの月や海のささのささの月見  
 月見まはささのささの月見  
 道ささのささのささの月見

岱水  
 八桑  
 利合  
 支梁  
 野坡  
 物屋  
 友五  
 石桑  
 太夫

一人は寝るこゝ 月見車  
谷一川相子又志々新つきこが  
寝入られく月見の帳をひく  
松原をよむ如けくくた月見か  
一志きり物をよむお月見の字  
名月よ眠りく居るお色く宿  
海也子舟やきくく月見車  
十六夜月  
いさよむや北平思ひつ初る  
十六夜月ハきいをわくく量りり

三七

泥舟 依々 子祐 楚舟 潤志 希志 如行 許六 所坡 花

娘と恋をなれと

不知お月や我身又志と月の欠

町中月

月か見ぬ御衣の縫乃せとくぬた

ゆきと娘の月を暖あしと

月乃雪鳥乃たあく何郡

飛くや人のうさおぬ乃月

鶏頭

照降よきん乃ちもや葉ぶ露以  
掃出ぬ露以忠実や持佛堂

杉屋 子珊 万子 文鳥 約書

木槿 花野 あか

木槿さくさく表へ出きてよ木場草  
白つきや花野をふり下り坂  
帯なひしし縄をさや花野に

楚舟  
楚舟  
蛙足  
急程

桐柳散

鶴百包とて桐乃一葉うね  
さよほ美又隠きて白く若草の  
さ柳さよふ若草の傷乃出さる

涼葉  
うね女  
浪化

稲刈

情魔地入や稲刈りともう美

長崎 卯七

る以付我志背肩ふや稲うら  
稲刈乃あいのまねやうさひ  
稲乃穂や地を志りつて流る玉  
刈交り田雨やいつ志ふ形  
春の青半稲さる此小水

肥前 嵐外  
流水  
支梁  
杉風  
子珊

栗

いふ栗さくあに侍もよ  
いかにや踏ふう長柳の家

作 楓声  
竹筋

江ノ葉

枝一本よ葉をよ送る

杉風

よ尼の多さよふり

三九

舎羅

蕎麥

夕日ろく切畑赤く蕎麥の茎  
半吠くゆり赤く花

桐実  
風國

雜秋

氣きふく流る遊女中鶴物  
花散れに苔芽もたふや猿ぐり  
鹿田子遊く這入や葉扇

今来  
山店  
希志

旅り

秋の日やけ家根りさけ宿まら

序志

廿九

又生や風もたふり以神の憂  
伸取くく九縷ぬおろくう如

意程  
流水

志堂をおひし

實の中よ儲り蓮の茎はあや  
足跡を尋く幸や行旅のぬ  
刀さや名もも形乃面白く

万子  
我峯  
苔蘊

山嵐

そ人乃勇氣を妹志あをれは  
今朝志務蛇心は降る筏うぬ  
鶉の聲を伝きぬ森乃申

後  
野紅  
之那  
様堂



大瓢鳴る事此事もう梨  
えかりと蚊を付と夜を水

辛

楚舟  
湖招

樂山子鳴子引板

声浪う呼川と見——うあふ子い  
お合よ成人糸のう——そや  
休む月を夜居さけりかりし  
一分の役——く朽ふあふ子う  
と喰さへ捨てて果る茶山子哉  
悔急する聲や夜明けの鳴子引

加列

盈月  
希志  
勇撰堂  
清  
松風  
大舟

何か笑へ様なり

三十

谷越り鳴子此繩や定りうら  
いひ子根繩うなりう引板の姿

鹿

大州  
比筋

退ふ席や角ぬきくけり舟の中  
おれを免はたふや男席乃角の枝  
痛も世の中角う先へや山と起  
なかりたに山とにあけ席乃多  
いふ——子寝耳は席の不使し  
掉 薪を聲を当さうぬと浮く如  
あは奥を昼の通ひ山鹿

肥後熊本

子珊  
泥芥  
昔仕  
希志  
杉風  
野長  
万年

小男麻志極ひ寝る者、庵車中 麻夕

梅の尾のある、二節、

山寺に麻をまゝと膏寝く所、風圃

退く、麻の飛越を為し、山店

草狩

松茸やスズキノコ、芝、尺、本、末、松、風

生る、けや人、鼻のき、尺、本、末、松、風

菌、夕、尺、本、末、松、風

草、狩、人、や、山、夕、尺、本、末、松、風

老、朽、乃、扶、く、所、う、人、松、夕、尺、本、末、松、風

能、つ、や、大、松、茸、志、心、ま、ま、イ 杜、若

か、山、茸、や、孫、り、エ 希、志

松、針、よ、能、つ、ら、ま、白、け、や、フ 野、江

菊

菊のよ、此、白、心、の、ま、ま、ハ 卓、袋

皆、何、ら、ま、ま、ま、か、ら、ま、ま、ハ 子

疾、さ、く、ハ 長、年

厚、啼、く、目、を、あ、く、菊、の、蒼、く、ハ 土、芳

小、料理、ハ 意、程

白糸題

あふれくふ中にきよき此照白

三十一  
杉 風

白菊や 朝うふら梨を 逢う起

全

夕暮をた

あふ菊や 夕食を 此行とくろ

全

白きくは 枝を 世間や 小葉白田

首 良

ふたをま 紅くく 行 行端

ハ 桑

枝をく 乃 庭の 夜影や 菊白く

袋 山

白菊は 枝を 結ぶ 事よ 忘る 計り

子 珊

菊の 外花の 白交を きき 事なる

利 合

白菊や 連折うら 花の ちき

泥 芥

あふ菊や 枝を 杖つ 椽桐 笠

石 菊

小葉 我 ばと 見 蝶乃 菊

若 任

白菊や 土を 移す 世を ち

楚 舟

よと 入 菊貫も 結ぶ 若く ち

依 々

十日

とく 白菊 かく せん 菊は ち

利 合

菊は ち 菊は ち 菊は ち 菊は ち

子 珊

菊は ち 菊は ち 菊は ち 菊は ち

仔 水

菊は ち 菊は ち 菊は ち 菊は ち

意 程

葉畑より麦種川を流す十日  
崩さく砂凡れ志菊少く  
此日とい菊の匂ひや  
まはさく一指をさく娘や  
万の葉

碓

小路より園より這入り碓  
やふ<sup>祝</sup>く園のさう<sup>哉中</sup>をさく  
流

十三夜

明と流る似ぬりしらひや  
流の月  
唐の十三夜人と傳へる  
流る月

流水

杉風

流志  
蕉栗  
貞松  
曾良

昔や免き雨見よせうや  
踏ぬく足跡とらるる  
後の月也や島はる時  
後其月幸ひ碓乃ち  
軒降りた乃月とく  
汗手傘衣は下り  
ぬきとく宿り  
えん月見をさく  
あぬえう  
膳の間をさく

杉風  
曾良  
利合  
徳丸  
泥芥  
依々  
石系  
右大  
洞志  
榊舟

雨降き月見乃もさす十と取  
後乃月雨の此の ときれや

暮秋 あらし向る弦償

こころむき我も淋 支那のる  
遠きぬをく何うつれあし秋のま  
たのむさにな方もれ や秋のま  
ふくかりしぬさく握さく秋乃くれ  
越ふあし徳振 年一んあさのる  
所あを狂さむしくれぬの暮

昔任  
子珊

芭蕉  
杉村  
希志  
権堂  
野坡  
楚舟

冬風一川を撫さるる島への南  
枝~~~~ぬ小雀さう~~~~ま  
久あ哉日雨もさるる風さる  
物志も川をさるるは川を月  
仕舞もさるる輪をすさるるこそ  
何やらさるるは心は持さるる  
さるる~~~~と胸舞用を市に中  
降~~~~と耳さるるに思つたさる  
風も袖味さるる白ふ下地ま  
珠取を果さるるは鼻城のま

楚舟

子珊  
杉村  
舟  
珊  
風  
舟  
珊  
舟

子舟のさめいりふ志川  
人教赤く虹乃う川ろむ  
粟稗乃盈ふかき実の入て  
仲寺此金そえまほれ秋  
月のにゆ消きけ圓くまかし  
物と峻とそゆ乃冷えつ  
初花は露根草を引くも  
雨のうきむ山を焼あ  
逢度り去年よりるを種  
才の家乃若讀仕うれふ

冊舟風冊舟風冊舟風冊

涼さる川の流乃礎のゆり  
梢の蟬は耳好きく好  
鉢米は残るり分る村のき  
い川ともなり丁と五百里  
吹やぬゆの雪志村あつ  
月見の客は味小料理  
舟楫の市燈消きそき  
おまをきほも舟とせ  
持病をも押付く近年の暮  
雪を水く雪復さく

風冊舟風冊舟風冊舟風

女志能相々々々理々貫ハる々々  
てーしーる々々々々院居々々々々  
浪文々有馬細工乃竹以悟  
空天子日何一も昼々々々々々  
指是々々々々々々々々々々々々々  
蓬来窓一草子盆の極

冊風舟 冊風舟

續別庭敷集下

冬之部

時雨

菟婦色はあは雪乃りし海に  
 深川を月も付あふ夜はくぬ  
 是袋もあふ志つとくはるは  
 一時のしれとありてはた  
 小夜はる誰とやとつては  
 海つとやましくこゝれ 雲  
 の煙りうたの夜はのしれは  
 時良の中はあふおの時は  
 時あふや町屋の中は葉作堂  
 神乃り根母とくはるは

子 冊  
 杉 爪  
 全 来  
 去 来  
 山 店  
 楚 舟  
 利 合  
 涼 葉  
 舟 坡  
 為 乃



空にまゝ流るる川は  
吹たつたけみあききつる時  
吹くりし時をよもふや柳  
お傘やよもぬるをりし  
大小を流るる野に流るる  
時鐘や風をよもふ夕時雨  
初時子火燈仕懸人母乃  
畦をよもふりしよれい  
橋の板志久ありし

亡父追悼

楓 声  
近 之  
流 水  
全  
清 風  
貞 和  
小 蜀  
越 中  
比 人  
序 志

一生夢酔愛没後追悼一陶置

仰倫々登の土志ありし

枯草

鬼門々先冬々川や枯うつら  
枯うつら根を志しり山乃草  
薬草をつふくや碛の枯草  
まぬく木をよもふりし  
上下の枝引志ありし  
まづつらきも志しり

冬草

楓 堂  
岸 外  
依 々  
序 志  
移 風  
全  
全

冬籠 目如くいふくまの祭家 中 住 三六 朱 控  
穴又時 送入くろや 成 中 麻 夕  
旅葛 籠中く良き 加 刑 平 成  
差繩乃 將作らせん 意 程  
山雀之 籠の小箱 全  
冬籠 牧 童

風

こがしに吹通る白く 旅 寝 所  
舟や 小家一り 此 節  
舟楫 子 川 珊 や村、送入る 子 珊

木葉

鶴 忠 寝る 繪る 此 陰も 木の葉 山 店  
渾 け 子の 葉 撰ふ 依 々  
子 木川を 子 珊 木の葉 子 珊 たり 子 珊 女 子 珊 あり 子 珊  
い 川 鳴 子 珊 る 子 珊 木 子 珊 葉 子 珊 の 子 珊 虫 子 珊 の 子 珊 心 子 珊  
葉 子 珊 買 子 珊 っ 子 珊 て 子 珊 葉 子 珊 を 子 珊 飾 子 珊 け 子 珊 木 子 珊 葉 子 珊 葉 子 珊  
を 子 珊 飾 子 珊 け 子 珊 木 子 珊 の 子 珊 葉 子 珊 を 子 珊 飾 子 珊 け 子 珊 木 子 珊 の 子 珊 葉 子 珊 を 子 珊 飾 子 珊 け 子 珊

緯扣

表門乃 竹よ 文 州  
う 風 圃 ち 風 圃 の 風 圃 中 風 圃 に 風 圃 走 風 圃 る 風 圃 木 風 圃 葉 風 圃 を 風 圃 飾 風 圃 け 風 圃

呼入む粥煮了る膏のそら抑加列流水

鴨千鳥

雄を誰平け良れく乃ふもも曾良

七ち手越乃塘にり鴨の啼おひ肥後東来

行つぬぬのまや名古有碑越中好風

以報や中をりふ鳥此川利合

火燧火

女病と一人ままぬこ事り車去来

小男乃扱んとるこ下燧石袋水

炸開や書初多所右左右加列景枝

寒夜對客

燈消す炉の光荊口

雜冬

指斗杉川くゆり花いのこ心白秀

糸仙まは川のま空や惠若源接風四

川蘆頭り一筋を一冬の橋子圃

二三寸三也く青一ち大根千川

えら進き家情女房や不根引利合

志とたるの姿此枯地を年檀堂

一比多かくとく見一枯寸うき加列一西

水仙のあつらひの如く廻り  
居る花の草は感の匂い  
世と怪し紙帳の如く  
戸の如く猫の如く  
耳秋をあつらひ人の葉吹

霜

木くの根の独りつら  
位も也おの枯葉一つ  
霜解の煙もさるや

大伴

智月

か

万子

甲

の  
山

少

野

槿堂

意程

四  
楚舟

楚舟

初しりふ肩脱  
もよあはは袋を  
初おれや味なきもの  
夜多知をと  
文相の夜や

電

降あつらひ  
電よきい  
色も怪我せぬ  
小坊まうつ

は

仔水

意程

四  
楚舟

楚舟

涼葉

野坡

杉  
風

今

梅山

夜更もろあまのふふとまじりて  
うねりも電もくはるる甘きあまの

里

流水

雪

おののふりしとくもや葉際のみはれを  
秋の雪ほくく敷木のしとくも  
暫もちりまもやもをあらう  
くらしと百俣湯をまきく  
初雪や 踏のよなうぬ大ま  
くらしや 堀壺さんと云くらし  
まきの新隣あまれなつら

万子 浪化 八子 意程 長緒 野坡 全

屋敷のけり

あゝ免程雪は伴出た  
内は寝て六道流も夜も雪  
行くとも四度くもたあり  
もま原納豆汁くもま  
九重は見ぬとぬ雪のあり  
鏡やう何やらはとくも  
お助遠よ

前口 母筋 曾良 風圓 去来 加列 花前 水札 伊賀 越中 十文

初まや 洞の丸葉乃 竹ささ木  
行人の鼻志赤さよ 雪乃りしれ  
伸りくまぬくもる 雪れ山家乃  
以 跡る雪のきさや 夜のあえ

肥後 仕 帆  
全 四 路 健

病裏の晩連人や 笑ん

松 風

狂りく

降るく 小家を 雪れ ぬの 露

全

そ 夜

ちれく といふ 寝 是 月 とき

全

お 市

晴るく 狂つ 老き 一 や 言 乃 入  
氣を付く 見 経 雲 一 山 伏  
物 一 一 氣 又 起 一 一 一 一 一 一 一  
唐 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
也 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
紋 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
そ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
秋 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

全 許 六 芝 尺 文 鳥 秋 風 全 子 珊 希 志 意 程

袴と川とあまけと裾乃さる年

御君庵の橋をゆく

ささまけ橋とく川流る  
人毎に都を去んたりさる年  
寒く咲ゆ中此小家枯るを  
ま着此振る袖をふさぐ年  
山菜花や庭さききき生れ来  
川乃や啓ちぬさる年  
起るとも寝さるもあはさる年  
冬の前ゆるりさる年

四三  
四 睡

万 子

流 志

平 成

清 風

一 西

一 西

山家りる

葉乃あけけよまきききき  
あきと人さる年  
冬の前ゆるりさる年  
野中まけ灯消る寒かたな

氷

いさふさふさ  
内外を氷さる年  
ころりと木魂をこころ氷かた  
ささまけ水さる年

色 蕉  
子 珊  
椋 堂  
四 睡

水子くぬく〜て冬を仕止る事

歳暮

世の中は胸より上は師走は  
あつた〜楽山子も似る焼拂  
燦々や梅も春 かり暮  
ま〜掃や一同除ね〜客の〜め  
燕乃明果も〜人さ〜を〜い  
吾〜積上や帰も〜下迄と〜流  
旅 行  
燦掃や又〜此茶屋も〜所〜い

四四

松風

如 行

流 志

流 水

清 風

意 程

全

万 子

左様と〜三つ四つ書〜まの文

炊火り花咲く〜小舟の〜

大車や傍を〜市乃人

掛念の中宿も〜あり自の暮

大車の聲〜川た〜京代

心通〜大小〜や〜を〜録

我〜石〜を〜を〜大海日

泣〜れ〜小〜つ〜も〜小〜

た〜や〜裁〜付〜〜来〜人〜志〜

梳店〜な〜〜〜〜る〜や〜年〜の〜市

秋 風

全

楚 舟

野 坡

子 珊

石 菊

泥 芥

利 口

支 梁

低 水



大平やふみく掃く雪乃粉  
こまくまきく草をむくる古倉  
何やうや傍らぬ先の庭せま  
花よふゆきを右のつくふの空  
なまらふきり煙ふきとら  
念佛も年比おきかえ月あきま  
嵐か川猫のうつく志師まは  
押合ふも足抱まきやまの市

この戸の嵐合もやみお月

岱水

大 依 子 希 洞 昔 之 曾  
丈 々 祐 志 志 任 風 良

四十一

蘇乃ころろ良徳餅の地響  
こりまきく伊ふまき新造つめま  
坂乃うやま竹連乃泊木  
時こまきく修炮乃跡や先  
明中めまきく八専此  
産糧も不断ちるけも先輝  
つひ正月の傍りこま  
春まきく丹後鶴乃浜山り  
畦壁川まきく是苗代の糸  
年くま早以所の花さひま

杉 利 太 曾 依 子 希 石 楚 太  
風 合 大 良 々 祐 志 菊 舟 大

こころしく 眠る 陽 焔  
 光付く 高柳の そとに 花  
 風の 響く とき 雲より 降る  
 鳴りかき 引 残し とも 昔 菖蒲 畑  
 香 徒の 花 も 事 始 ぬ 暮  
 大 荒の され 月 見の 家 持  
 とう やら 冷 ぬ 故 屋 乃 身 障り  
 梯の あり 以 川 乃 小 役 々 傳 へ 之  
 こころ しく しく 磨 乃 鳴 け け  
 隣り あり 尺 訓 ぬ 空 の 子 を 連 へ

利 合 同 志 皆 良 志  
 杉 風 依 似 子 祐  
 楚 年 潤 志 希 志

一寸も 遅く 舟 乃 傳 物  
 氣を ひ 川 々 夏 の 夕 明  
 今 昔 柳 乃 衣 裳 又 入 添 々  
 夕 け 々 々 年 々 々 々 々 中  
 大 空 乃 輝 乃 多 々 後 乃 々  
 作 々 々 々 我 秋 乃 葉  
 羽 織 の 木 屑 打 振 ぬ 々 々 々  
 祝 事 仕 々 々 々 祝 々 々 々 々

利 合 希 志 杉 堅 子 祐 依 似 利 合 大 旨 白 不 業

昔之つとつちを神鳴  
順くは振るり河後志  
い川もすさ小残ちら久く  
谷も平地も花の咲けり  
比日の水さるる一倍  
石 洞 志  
依 水  
左 大

静物物なきく物く物なき  
よらハ 掃貫氷霜が鱧の形  
維温陽氣は朽す事速  
あきふ探ふは冊は作  
あきふ探ふは冊は作  
あきふ探ふは冊は作

為ハ陽のつとつちを神鳴  
十日のつとつちを神鳴  
暮ひハ孔門之三子由有  
他反惜あえき悼をい  
何増撰をいハ予々悼をい

元禄十二卯初冬 松風

續別座叢集追加  
流形乃松根結そゆる  
をいハ振る五月乃  
啼かせぬ夏の蛙乃きよ  
利合 曾良 水

志や〜〜 此の〜〜  
あゝあゝ 寂の〜〜  
摺ねろ〜〜  
妙哉もやや ちよとありけり

依 杉 太 子 乙 大 祐 榮

更衣旅行

一川 脱〜〜 何まねぬ 又衣

そせ 氏

病衰

瘦肌や〜〜 九もろ〜〜  
夜更 氣位〜〜 穠穢 眩

利 杉 合 氏

昔薬や〜〜 山〜〜

フシゴ

野 紅

卯花

うねる〜〜 夜送〜〜 甲 續  
卯乃花に 五里も 月の定らぬ

杉 曾 良 塔

杜鵑

うそふ子や 老の仕事に 郭公  
初夢を日 懐りの 夢 何ぞ  
三日月の 影を 影消 凡はとまらぬ  
ま川の ありと 山路の つかぬ 草  
花もとも 常 響く〜〜 冨 魂

合 利 合 曾 良 荊 口 支 梁

素名まゝ

関橋よなるれ出船り寂し

牡丹

花の蝶まきわく失くお牡丹

ま牡丹女と子類を探し

上巻の白粉まもるほまけん

旅り牡丹乃花の夕ア

杜若

杜若ふあるくらく降を

ふ産さんくちよ関や

楚舟

杉屋

全

利合

杉屋

希志

氣乃志ある中六島や遊子花

五月雨

空の地まき川よたの娘五月雨

五月雨やたかく新く成つてみ

持病ふまき

死らけむる日まもる大い

五月雨や通く新く成つてみ

ささるれの志まもる大い

雨川やけまもる濁る身月雨

海のまもる大い

楚舟

杉屋

全

全

楚舟

千川

右大

依

辛酉や松を地へ是は月而

幸  
焚舟

蛭牛

そり落る今拾ひやうとあり  
将之何をつらむか多しあり  
古道を木よりあふれ一蛭牛  
ころろと毎こけ落一蛭牛

利合  
袋水  
石榮  
杉屋

管旅行

水多や管よりそり春よりぬ  
桃灯を打消し見し管よりぬ

四膳  
潤志

高蒲深川

今朝あやれ狂草深一水ぬも  
裸より一簑是よりあつる蒲賣

松舟  
楚舟

雑夏 熱海の磯より

夏草一集つて登れ尻より

嵐牛

あつる娘をあつる人の  
あつる中つる人の

昨百合の小松よりあつる  
川橋や隅りにあつる思乃里  
熱川の秋より一雙より柳より  
次のふと摘菜よりあつる  
菊中より首よりあつる

野坡  
牧童  
那紅  
此助  
小菊

涼き川をせり山田の水

千川

山田の川をせり山田の水

那根よもお小田の涼きよ  
思ふよもいれれ 根のよ葉を  
友よより根の木やをぬ周知のぬ  
端ろくさくやぬ根の底清く  
昼中 清くのよを痛て見し  
み雙ろくさく唯よのぬ病よを  
木のよをよる士を痛さく味のよ  
よよれと境の思ゆるあ川よを

楚舟 利合 小筍 意程 曾良 泥芥 楚舟

慈姑の哉きや根の風をそそく

合

白雨

夕きやよそらよをぬ流のよ  
いよよらよ歌く清くや塩焼く  
接子よを川夕きやよをよ

依水 利合 杉屋

中の峯

形きくよのよを清くよのよ  
照付く沖よをきらぬ中の峯  
又あひと北へ迎るよをぬ称

子祐 意程 白雲

涼

家門へ来り酔のあふせきみ華  
涼さた抱えく見よれね乃新  
まゝあんと月夜よなれそうれりく  
月新や涼く涼くまゝあまら  
雨の若れいりりりりりりりりり

五十二

楚舟  
蒼空  
利風  
野合  
野坡

え禄十三辰仲夏

一晶





